

Empirical Analysis of Educational Outcomes Emphasizing the Role of Higher Education

姉川, 恭子

<https://doi.org/10.15017/1785352>

出版情報：九州大学, 2016, 博士（経済学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済



氏 名	姉川 恭子		
論 文 名	Empirical Analysis of Educational Outcomes Emphasizing the Role of Higher Education (高等教育の役割に着目した教育成果の実証研究)		
論文調査委員	主 査	九州大学	准教授 浦川 邦夫
	副 査	九州大学	教授 磯谷 明德
	副 査	九州大学	准教授 八木 信一

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、高等教育での学習習慣やそれを促す環境要因（大学の学習支援環境・生活環境等）が、学生の卒業後のキャリア形成、賃金、主観的厚生に及ぼす影響について、大学データならびにアンケート調査を用いた実証分析を行っている。高等教育における教育成果が労働者の賃金に与える影響については、経済学の分野で様々な研究結果がこれまで蓄積されているが、本稿は、高等教育での学習習慣と本人の卒業後の学習の関係や、大学の生活・学習支援が学生の学習意欲に与える影響にも注目した検証を行っている点に特徴がある。また、日本の各大学の退学率を調べた読売新聞『大学の実力』の大学データを用いることにより、日本でまだ分析事例が僅かである「退学率の要因」に関する実証分析を行っている。論文はサーベイ論文（一章）を含め、全体で六章からなる。

論文の二章では、Yano(2009)の「学び習慣仮説」に基づき、大学時代の学習習慣と賃金、就業選択、仕事満足度との関連について検討を行い、高等教育段階でのStudy engagement（学習環境や社会環境にうまく適応すること）が、特に男性の場合、その後の労働市場でのWork engagementの達成可能性と関連している点を示している。三章では、幼少期の文化的体験・習い事の経験と、大学在学時の学習姿勢との関連について検討し、他の重要変数（親の学歴、幼少時の生活水準、小中高時の教育経験・教育成果、年代など）を制御した上で、習い事経験（習字やそろばん等）と、大学時の学習姿勢に一定の関連があることを示している。四章では、近年の日本の退学率の増加を踏まえ、大学における学習・生活支援環境が退学率や標準修業年限卒業率に与える影響についてパネルデータを用いた検証を行っている。結果として、生活支援の程度と退学率との間に有意な関連はみられないものの、学生当たりの教員数・図書貸出数が高い大学では退学率が低い傾向にある点を指摘している。五章では、Astin(1991)のI-E-O modelの視点を踏まえ、私立大学等経常費補助金が退学率に与える影響について媒介分析や分位回帰の手法による検証を行っており、大学が学習・生活支援を適切に行う事により、退学率の低下や学生の学習意欲の向上に影響を与え得る点を推定結果から示している。調査の結果、本論文は大学データを用いた計量分析に基づき、日本の高等教育改革に対して一定の政策的含意を導いている点が確認された。

以上の点から、本論文調査会は、姉川恭子氏から提出された論文「Empirical Analysis of Educational Outcomes Emphasizing the Role of Higher Education」を博士（経済学）の学位を授与するに値するものと認める。